

A-2-60 自発呼吸シミュレータを用いた看護教育プログラム —グラフィックモニタを呼吸アセスメントに活用する—

大阪大学医学部附属病院 集中治療部
能芝範子 石川順子 鹿島泰子

【目的】 自発呼吸シミュレータを用いて、グラフィックモニタ活用のための看護教育プログラムを作成し、その有効性を検討する。

【自発呼吸シミュレータの概要】

ジェットラング®(y-sun メディカル社製)任意の呼吸パターンに従い自発呼吸を模倣するモデル肺

【方法】 教育プログラムは、段階1「換気モード、従量・従圧式換気の理解」段階2「PSVでの自発呼吸の同調性の理解」段階3「グラフィックモニタから肺の状態を推察」の3段階とした。対象は当ICU看護師23名で、各々が希望する段階からの受講とし、受講前後で段階毎にアンケート調査を行った。プログラムの実施は、ベネット840®にジェットラング®を接続して、受講者にはグラフィックモニタを中心にってもらい、本研究者が説明し段階毎に少人数で行った。今回の研究では段階2までの実施とした。

【結果】 当ICU看護師23名中、段階1から受講希望が15名、段階2から受講希望が8名であった。段階1から受講の15名への設問「従量式、従圧式換気における圧・流量波形を理解できますか」の回答は、受講前は「あまり自信がない」が10名(67%)、「できない」が5名(33%)であったが、受講後は「できる」が9名(60%)、「あまり自信がない」が6名(40%)で、「できない」は0となった。段階2から受講の8名への設問「PSVにおける圧・流量波形を理解できますか」の回答は、受講前は「で

きる」、「あまり自信がない」が半数ずつであったが、受講後は「できる」が6名(75%)となった。受講後の感想は「実際に設定を変更しモニタの変化が目に見えるのでわかりやすい」「A/CとSIMVの違いが自発呼吸出現時のモニタをみることでわかりやすい」「呼吸感度の意味が理解できた」などであった。

【考察】 グラフィックモニタの理解を深めるために教育プログラムを作成した。アンケートの結果、プログラム実施により主観的な理解度は向上していたが、テスト形式などの客観的な評価も必要と思われる。また、プログラム実施直後だけでなく、その後のケアで活用できているのか追跡調査も必要である。実際に患者のグラフィックモニタを見て疑問を感じた時など、波形の保存や印刷機能があれば後で学習することも可能ではないかと考える。

【今後の予定】 段階3「グラフィックモニタから肺の状態を推察」コンプライアンス、抵抗の測定や肺の状態による特徴的な波形パターンを学習する。

【まとめ】 自発呼吸シミュレータを用いた看護教育プログラムは、グラフィックモニタを活用し、換気モード、圧、流量波形を理解するなど基本的な教育に有効である。